

# 市民連合

## ぐんないニュース

### 第24号

2025年8月発行

発行 市民連合 ぐんない

共同代表 知見邦彦

森山正男

参院選 山梨選挙区の 野党共闘 早田候補を  
大月(6/27,28) 上野原(29) 都留(30) 軽トラで 支援宣伝



次の選挙は 皆さんの給料と所得を 上げるための 重要な選挙です

私たちは「市民連合ぐんない」の仲間です。7月の参議院選挙は 戦争を止めるための 非常に重要な 選挙です

7月の参議院選挙は 戦争を止める選挙です

選挙でみんなが望む政府をつくりましょう

30年も 実質の給料が上がっていないのは 世界で日本だけです

十兆円の 戦争準備の防衛予算を 医療や福祉や教育に 使いましょう

日本のすべての 原発を永久に 停止しましょう  
ドイツや台湾のように 原発をなくしましょう

北富士演習場を 返還して 平和利用しましょう

消費税を 5%にして12万円を家計に 戻しましょう

戦争や原発を 絶対子供や孫に 残さないようにしましょう

一人当たり10万円の防衛費 合計10兆円を 医療や福祉・教育に使いましょう

お米の値段を 安くしましょう

戦争を止めるために 選挙には棄権しないで みんなで必ず投票に行きましょう

とにかく選挙にいきましょう 投票にいきましょう

## 平和行進 平和の象徴 富士山の麓 山中湖村でペナント交換

### 忍野村、道志村から山中湖村を経て大月市へ

今年も平和行進がやってきました。7/16、この日は午前中に忍野村、道志村を經由しての山中湖村訪問です。当初 13 時からデニーズ前でスタンディングの予定でしたが、雨天予報のため、13 時半から村役場玄関前でのペナント交換などとなりました。

当日は甲府から革新懇の遠藤事務局長と福田さんが、市民連合ぐんないからも知見さん、森山さん両代表が来てくださり、地元からは「山中湖 9 条の会」のメンバー 4 人が駆けつけました。村役場からは高村正一郎村長と総務課の職員が出ていただきました。署名されたペナントをいただいたあと、村長さんから挨拶をいただき



平和の象徴である富士山のおひざ元の村として、一貫して平和な社会の実現を標榜して村政に取り組んできた旨のお話がありました。



「九条の会」の阿部さんから、村議会が「核兵器禁止条約の批准を求める意見書」や「パレスチナ和平を求める意見書」を採択してきたことを確認し、ペナント交換へのお礼が述べられました。最後に、「なくそう核兵器」のパネルを掲げて写真を撮り、大月・上野原への引継ぎを見送りました。

### 被爆80年 核兵器のない、戦争もない平和な世界へ

みなさん、こんにちは！原水爆禁止国民平和行進です。1984年8月20日、広島平和協議からたった1人で決意を始めた行進は、核の持ち込みを認めないとする原水爆禁止の訴えを全国にひろげながら、一日も休まず歩き、その途程に感動をかきたた人びとの行進にこわわら、この年8月12日に東京の大田区で開催される第40回原水爆禁止世界大会に到着したころには、のべ10万人が参加する大行進になりました。以来、全国で自治体や地域のみならずの協力を得ながら、被爆者とともに核兵器のない平和の願いをつないで8月の広島、長崎をめざして歩いています。世界にはいまも約1200発の核兵器が存在し、戦争、戦争のつづき、戦争が一日も早く終結し、平和の訪れることを願っています。核兵器はせつないに使うべきではありません。ことしは広島、長崎の被爆から80年を迎えます。80年の節目を迎えるにあたり、昨年12月、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）がノーベル平和賞を受賞し、世界中から賞賛の雨が降りました。1945年8月、アメリカが広島と長崎に落とされた原子爆弾は、一瞬にしてふたつの町を壊滅させ、その年の暮れまでに合わせて29万人を超え多くの命を奪っていったことになりました。その多くが、市内の作業に動員された学校の生徒や子どもたち、女性、お年寄りなど一般市民でした。かろうじて生き残った被爆者は、放射線による長期障害などに苦しみながらも「こんな悪いものを誰にもさせてはならない」と核兵器の非人道的、その破壊を世界に訴えてきました。ノーベル平和賞の受賞は「核兵器の使用はせつないに許されぬ」という被爆者のメッセージです。核兵器も戦争もない平和を、被爆者のみなさんと実現させましょう！どなたでも飛び入り参加、大歓迎！



**カナー交流会 「むえるぶえる」第4回**  
**“沖縄のこと その② 沖縄戦から現在まで”**  
**北原日々希さん(都留文大生)報告、三線(さんしん)演奏**

7/5、古川渡のギャラリーカフェ「カナ-」で「沖縄のことその②」（沖縄戦から現在まで）の報告と意見交換会が開かれた。読売新聞郡内支局の加藤さんと沖縄在住の北原さんのお父さんも参加された。



今日は修学旅行で実際に見聞きしたことから話します。1945年4月1日に米軍上陸、12週間、地形が変わるほどの「鉄の暴風」が吹き荒れた。あのGammaでの集団死、光が差し込まない狭いところに100人以上も暮らしていて、米兵が迫ってきたらパニックになっただろうと思った。軍から「米軍につかまるとは許されない」と叩き込まれていたのが集団自決となる悲惨なケースが多かった。沖縄県民4人に一人が亡くなったと言われている。

住民の死者が多いのが沖縄戦の特徴だ。本土決戦に備える時間稼ぎの沖縄戦だから住民を巻き込む性格が強くなる。首里から南部に司令部が移動したのも時間稼ぎのためだった。住民も南部に避難していた

「むえるぶえる」とは  
様々なテーマで、互いの知識、体験を共有する場として2024年9月17日にスタート。住民・学生に開かれた交流会。  
「むえるぶえる」とは、読む・考える・学ぶ・伝えるの送り仮名。

ので被災者が増えた。死者は住民が10万人で軍人が6万人といわれている。「一人十殺一戦車」、一人で10人殺してさらに戦車一台やれ、という命令まであった。従軍看護隊員、ひめゆり学徒は18歳未満も対象となった。法律的にはアウトだったのに動員された。保護者の同意が必要だったが軍が同意書を偽造した。前知事の大田昌秀（琉球大学名誉教授）さんによると、20人ぐらいの学生が「戦車を止めてこい」と命令され切り込んで行ったがだれも帰ってこなかった。

NHKで不発弾処理の大変さを報道していた。当時の技術では不発弾になることが多く、何万発残っているのかがわかっていない。住宅地や、水道工事をして見つかったり、自衛隊隊員が負傷したりしている。処理は国と地元の自治体が負担を分け合う（処理費は一発100万円）が、自治体の負担は重い。沖縄戦は終わっていない。

伊江島に行ったが、激戦地で沖縄戦の縮図と言われ、日本軍の東洋一の大規模な飛行場があった。そこでも悲惨な集団自決が

あった。その伊江島の今は、地図を見ると島の 30%が米軍の基地だ！占領されてそこがそのまま米軍基地になっている。沖縄戦はまだ終わっていない。

米軍が占有している土地は沖縄本島の18%、国内の米軍基地の70%までが沖縄にある。戦後、沖縄が本土と切り離されてアメリカの施政権下に置かれ、「銃剣とブルトーザーで」土地は強制的に米軍に接収された。一番危険な普天間基地はそのままで撤去されていない。沖縄が復帰する時には米軍基地がなくなることを期待していたが、そのまま基地はある。



住民への戦後補償では米軍の協力者・関係者は補償され、一般住民は補償されず、両者に溝が生まれ、分断される事態が生じた。沖縄の出身の学生は、親たち世代が言い争いをしてるのを見て育ってきたから、自分たちはそういう話をするのがタブーなのだという。本土でも空襲の被害者が補償を求めても「国民全体が受忍するべき」となっている。

ベトナム戦争で沖縄の米軍基地から攻撃したが、沖縄戦を経験した人からすると

それはたまらないことだと言われる。

## 意見交換

\* 高校生の修学旅行は沖縄でしたが、全然知らない状態で行ってしまったのもったいない思いです。高校でもその事前学習とかなかったんです。

\* 私、沖縄 22 年住んでますので肌感覚のところでお話すると、親世代があの戦争は何だったんだと語っている中で、そこに真実だとか意味だとか考えることに、もう疲れてるんじゃないかなと。若い人たちは、その事実を忘れていないが、それを軸に考えていく発想はもうないんじゃないかなって。小さい島ですから、小さくて力がないものはやっぱり何か取り入れていくことも大事なのかなと。沖縄の方言使えない人たちも圧倒的に多くなっています。

\* 戦後 80 年ですので 6 月 23 日を沖縄で迎えたいと、何もできない自分ですけれども、あの 6 月 23 日という日を現地で迎えることに意味があるという思いがあって 3 泊 4 日、沖縄で過ごしてきました。辺野古にも行って現実を見てきて、本当にこんな綺麗なところに、自然の豊かなところにあの飛行場を作るといってもない工事、政府もできることを信じて無いんじゃないか、何十年経ってもできないんじゃないかという現実があるにもかかわらず工事が進んでいます。

\* ヨーロッパの連合国側の国民と日本人は先の戦争に対する感じ方、考え方が違う。戦争をやる大儀が違うからかなと思う。

## 第27回参議院選挙を終えて

2025 年 7 月 21 日 安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合

自公政権に再び国民の厳しい審判が下った。日本政治の流動化は今後さらに加速するだろう。私たちはこの度の選挙を、「自公政治からの決別」、そして「来るべき政権交代」への足掛かりとして位置づけ、立憲各野党に共通政策、そして共闘の維持拡大を要請した。結果的に、32 の 1 人区のうち 17 選挙区で「野党共闘」が実現し、自民を 14 勝 18 敗にまで追い詰めた（前回は自民 28 勝）。今回の選挙で、獲得議席数は自公の与党は 47 議席、野党は 78 議席、結果として昨年の衆議院に続き、参議院においても、自公（与党）は少数となった。立憲主義を踏みにじり、長年国民生活に背を向けたまま裏金政治を温存する政権に、明確に NO を突きつけることができたのは、もっとも大きな成果であった。市民連合はこの成果を実現するために、全国で一定の役割を果たすことが出来た。

しかし自公の凋落は、必ずしも立憲主義や「リベラル」の復調を意味しなかった。今回、私たちが共闘を呼び掛けた立憲野党は軒並み伸び悩み、戦後民主主義や「リベラル」な市民的諸価値を公然と否定する政党が台頭し、メディアを席卷した。昨年アメリカ大統領選がそうであったように、社会の矛盾や不安の矛先が、与野党含め

「既存の政治」全体へと向けられ、“サムシング・ニュー（新しい何か）”を求めた世論の一部は、従来の平和主義や立憲主義というより、むしろナショナリズムや排外主義へとなだれ込んだ。かつて政治学者の B・バーバー氏が『ジハード vs. マックワールド』で分析したように、経済のグローバル化（マックワールド）が進行することで世界は一つになるのではなく、かえって社会内部に差別や偏見、憎悪や怨嗟が醸成され、相互扶助と対話を旨とする民主主義や市民社会の基盤が壊されていく。今回の選挙ではむしろ、このようにファシズム化する世界社会の「危機」に目を向けるべきだろう。日本政治も今後さらに本格的にこの問題と対峙することになる。これからさらに流動化する政治状況の中で、「市民」的な諸価値に基づく政治勢力は何を実践していくべきなのか。今後のファシズム、そして戦争という歴史の慣性に抗うためにはいったい何が必要なのか。時代の分岐点に立つ私たちは、選挙の度に奔走するのみならず、まさにあらゆる垣根を超えた日常的な対話や実践によって、この根本的な課題克服のための活路を見いだす必要があるだろう。そしてこの危機感を共有する市民と共に、混迷する時代の羅針盤、すなわち「信じられる未来」の具体像を、草の根から構想し、実現していかなければならない。